

感覚運動経験を大切にした保育

－ さくら・さくらんぼ保育の実践から －

和久田 佳代

聖隷クリストファー大学

“The Childcare that valued Sensorimotor Experience” － A Study on Sakura・Sakuranbo Childcare －

Kayo WAKUDA

Seirei Christopher University

キーワード：感覚運動経験、さくら・さくらんぼ保育、乳児保育

Key words : Sensorimotor Experience, Sakura・Sakuranbo Childcare, Infant Care

はじめに

発達が気になる子が増えている。2012年の小・中学生を対象とした文部科学省の調査では、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合が推定6.5%であった。この調査で小学校1年生では同9.8%であった。¹⁾ 10人に1人は発達が気になるということになる。

木村(2014)は2003年及び2006年に全国の5～6歳の健常児を対象に行った発達検査(JMAP)で約3～4割の子どもに感覚の使い方の崩れが見られたと述べている。²⁾

発達は活動や経験、環境によって変化する。自発的な運動や行動が、感覚運動機能を通して知覚されることで経験となる。このような感覚運動経験(運動・活動と知覚の循環)が起こる環境が重要であるとされる。³⁾ そして感覚機能は、胎児期より発達し、新生児は生まれたときから高い感覚機能をもち、これらの感覚機能が学習及び認知機能の発達の基盤となる。⁴⁾ つまり乳幼児期の豊かな保育環境や感覚運動経験が非常に重要である。

筆者は斎藤公子によるすぐれた保育実践「さくら・さくらんぼ保育」に着目し、「発育発達過程に沿った子どもの運動あそび」⁵⁾において運動学的な視点からその重要性を述べた。「さくら・さくらんぼ保育」では自閉症の子どもが、言語や認知の訓練をすることなく、保育の中で育っていった。その様子は斎藤の著書『さくら・さくらんぼの障害児保育』⁶⁾等で知ることができる。

本稿では、『さくら・さくらんぼの障害児保育』を中心にその著書やDVD等の資料から、自閉症など発達障害の子どもが育っていった「さくら・さくらんぼ保育」の特徴を、感覚運動経験や中枢神経系の統合の視点から考察し、発達が

気になる子が増えている現代の保育や子育ての課題を明らかにする。

なお、文献からの引用が長くなる部分については斜字とした。また、複数の表記がある用語については基本的には下記のように用い、引用中の表現は文献のままとした。(表1)

表1 用語について

本稿での表記	引用文献中の表記
子ども	子供
障害	障がい
あおむけ	仰向け、背臥位
うつぶせ*	うつ伏せ、腹臥位
腹ばい位*	腹這い位
腹ばい	腹這い
前庭覚	前庭感覚、平衡感覚
固有覚**	固有受容感覚

* うつぶせは頭部も伏せている姿勢で、腹ばい位は頭部を上げている姿勢とする。

** 深部感覚とする分類もある

さくら・さくらんぼの障害児保育

斎藤公子(1920 - 2009)は1956年に「さくら保育園」を創設、1967年に埼玉県深谷の農村部に季節保育所(現在のさくらんぼ保育園)を創設した。子どもの心と体を豊かに育むために自然と保育との関係を重視し、日々の保育実践を土台に、自然を教師として子どもが成長するのを助け、子どもたちの全面発達を目指す保育を実践した。

斎藤は「さくら・さくらんぼの保育は生物進化発展の法則に則って創られた」と述べ、「さくら・さくらんぼ保育園で生活することによって、全面発達させることができた」としている。⁷⁾

斎藤は「さくら・さくらんぼ保育園は開園以来さまざまな障害児を保育してきた。(中略)なかでも多いのは自閉症児であった」⁸⁾とし、「零歳から私たちの園に入園した子どもたちは、

満2歳頃までには妊娠中、および出産時の発育のおくれを克服しつつあることがうかがわれ、乳児保育の重要性をますます痛感するのである⁹⁾とし、以下のように述べている。

私たちの園の広い土と樹木にめぐまれた、空気の澄んだ環境、および、私たちの園の独特のリズム遊び、自然食を中心とし、白砂糖をつかわない調理による完全給食、テレビ、レコードなどの機械音を使わずやさしい肉声での語りかけ、戸外で思いっきりからだを動かしての遊び中心の保育、が健常児たちの全面発達を促すと同時に、その子らの中で育つ自閉症児たちにとっても教育効果がないはずはない。¹⁰⁾

このように豊かな自然環境とリズム遊び、自然食、遊び中心の保育を通して、多くの障害児が育っていった。

1. 自然に満ちた環境

さくら・さくらんぼ保育園は、たくさんの樹木に囲まれた自然豊かな環境のもと、園庭には意図的につくられた6mの高さの築山があった。斎藤は「本ものの自然を」として、次のように述べている。

わたしが保育園を建設するに当たってまずもっとも大切に考えたこと、それは本ものの太陽、本ものの空気、本ものの土、本ものの木の床、本ものの畳、本ものの芝を子どもたちの全身に感じさせたい、ということであった。それは乳幼児の神経系の発達の土台の時期を預かる仕事だからである。¹¹⁾

庭には大きい土山があり、子どもたちは年齢に応じてさまざまな遊びを工夫し、それがそれぞれの年齢の発達を促すのにたいへん役立った。¹²⁾

このように斎藤は乳幼児期を神経系の発達の土台の時期ととらえ、本ものの太陽・空気・土

などの環境を重視していた。

2. 水・砂・泥遊び

皮膚感覚を大切に育てることを目的に、水・砂・泥遊びが大切にされていた。斎藤は「重要な水遊び」とし、以下のように述べている。

私たちは生物の歴史から言って、最も基本的な感覚機能としての、皮膚感覚の発達を大切に考えて、ともかく、水の感触に夢中になるこの1歳児の時間を保障してやるよう、庭に低い水道の蛇口をたくさんつくるようにしている。¹³⁾

はだして土を踏むこと、思い切り水と戯れること、泥んこになって泥をこね回して遊ぶこと、これらの行動は幼い子どもが例外なく好むものであり、しかも、子どもの正常な発達のために欠くことのできない条件なのである。¹⁴⁾

水・砂・泥はまだ力の弱い乳幼児にも自らの意図で変化するため、自発的に働きかける力が育つと考え、小さな力でも変化させる水遊びから、砂遊び、泥遊びへと発達に応じて環境を整えていた。

3. 散歩

園から出て毎日自然の中を散歩するのが日課であった。年長児になると2時間も散歩した。

足腰の発達を促すためと、さまざまな自然を発見し、さわりの認知の機能を発達させるために、毎日散歩を日課とした。¹⁵⁾

また、斎藤は「はだして土を踏む」として、以下のように述べている。

私たちの園では0歳、1歳の間は冬でも靴下をはかせないで育てるのだ。これは最も急激な脳の発達の時期だからである。感覚器官と運動器官をフルにつかい発達させてやる必要があるのだ。幼いときは、足の裏も感覚器官であることは乳児を観察するとよくわかる。¹⁶⁾

全身の皮膚感覚を大切に育てることがまず第一に大切にされなければならないのだ。¹⁷⁾

このように斎藤は皮膚感覚の発達、感覚器官と運動器官の発達、神経系の発達を大切に、保育を行った。

4. 0歳児の保育とその環境

さくらんぼ保育園の0歳児室は、部屋の中にベッドはなく、歩行器もコンビラックもない。畳の部屋と檜の板張りの部屋と檜の板張りのテラスがあり、そのテラスには柵がない。斎藤は「つかまり立ちを防ぎ、十分に這わせるために、柵を設けていないのである」¹⁸⁾という。そして、テラスには乳児が上り下りして遊ぶ木製の階段が置いてある。

斎藤は「乳幼児期に大切なこと」として、以下のように述べている。

われわれはもっとも乳児期を重視し、ハイハイ運動などを十分にさせるよう、部屋の造作、広さ、床の材質、また衣類の作り、材質まで、運動しやすいように心くばりをするのである。

0歳時期はまず十分に安眠できる部屋、(中略)、部屋の中で赤ちゃんがうつ伏せの位置からも豊かな自然が見える部屋、こんなところでゆったりとハイハイ運動などをたっぷりさせたい。¹⁹⁾

生後3か月頃、首が座る頃から、「目が覚めているとき、一定時間腹ばいにさせて、自分の腕で体を支えて首をあげる努力をさせる」、腹ばい位では「湯上りタオルを三つ折りにしてぐるぐると巻いた細長い枕のようなものをあらかじめ用意しておき、両脇の間に入れてやり、上半身をゆったりとさせて、手を伸ばしておもちゃなどを取れるようにしてやる」²⁰⁾とする。

斎藤は乳児期を最も重視し、首が座る頃からは一定時間腹ばい位にさせ、自らおもちゃに手

を伸ばしたり、屋外の豊かな自然を見たりできるようにし、また腹ばい移動を促すよう斜面(ハイハイ板)や段差をつくった。

「腹臥位は背臥位と比較して、自らの意志に基づいて環境を捉えることが有利な姿勢であり、自己の意図と知覚情報との統合を図る意味で、乳児にとって重要な姿勢」²¹⁾とされている。

このように斎藤は乳児の発達過程と感覚運動経験を重視した保育を行うことで、多くの障害児もその中で発達していった。

基本のリズム遊び

斎藤は「私の保育の真の師に捧ぐ」の中で、井尻正二(1913-1999)とのかかわりをあげ、トスカ(重篤な脳障害をもつオランダの少女)は、「私が『個体発生は系統発生を反復する』という信念にもとづいて考え出した『リズム遊び』による保育で発達した」と述べている。²²⁾

さくら・さくらんぼ保育の特徴のひとつは、この「リズムあそび」である。音楽のリズムに合わせて、子どもたちはうさぎ、あひる、こまなどの親しみのある動物に模して、這ったり、転がったり、跳んだり、走ったりするうちに、子どもの体の骨や筋肉、神経系の発達を促し、育てていく。

ここでは基本のリズム遊びと位置付けられている1目交(まなかい)、2金魚、3どんぐり、4両生類のハイハイ、5こま、6ロールマットについて、取り上げる。

1. 目交(まなかい)

乳児を、目を合わせて抱くことである。斎藤はNHK特集『赤ちゃん』(1983年放映)で紹介されたブラゼルトン博士の赤ちゃんの抱き方から学んだと述べている。²³⁾

片方の手で首を支え、もう片方の手をお臍のちょうど裏側に添え、カエルのように開いた足をそのままお腹につけ正面に抱く。背骨がゆるやかなS字にしながら優しく揺すりながら脱力させる。

こうして抱いていると、生まれてすぐの赤ちゃんでも、目と目が合うとニコッと微笑む。

目が合いにくい赤ちゃんも根気よく抱き続けることで、ほとんどの赤ちゃんは目が合うようになり、その後完全に脱力してぐっすり眠る。²⁴⁾

斎藤は「この時期にきちんと目と目が合った赤ちゃんに今まで脳の発達に遅れが出たことはない」²⁴⁾と述べている。実際に、DVDブック第3巻『赤ちゃんの育て方』の中では障害を抱えて生まれたAちゃんが、母子通園で母親と保育士に根気よく抱かれ続け、最初のうちは向き癖があり、まっすぐ抱かれずに泣いてばかりいるが、根気よく目交をして抱き続けられることによって目が合うようになり、脱力して眠れるようになっていった様子が紹介されている。²⁵⁾

頭部と背骨を支えられ、養育者の手に抱かれること（触覚）、背骨がゆるやかなS字にしながら静かに揺すられること（前庭覚）、目が合うこと（視覚）、語りかけられる声を聞くこと（聴覚）により感覚運動経験となっている。この時間を通して安心感、愛着が育まれていくとともに、脱力し、感覚機能が高まる。

加藤（2016）は「目を見つめ視線を交わすアイコンタクトや、表情・共同注視・視知覚（ビジョン）、人への関心（注目や模倣など）は、『教えなくても自然と身につくもの』ではなく、保護者や保育者が毎日の生活の中で、児と視線を合わせながら身につけるよう努力すべきものである」²⁶⁾と述べている。生後2ヵ月頃からの抱

き方を明確に示している実践は少なく、「目交」は感覚運動経験をもち、安心感、愛着が育まれる貴重な実践方法である。

2. 金魚

床にあおむけ、またはうつぶせになって、背骨を静かに揺らすリズムあそびである。

魚の水中での運動にならって、背骨を魚のようにくねらせる運動がまず土台となる。

0歳児はうつ伏せのときに、足の親指の蹴りが出るまでゆったりと揺さぶってあげて欲しい。この親指の蹴りが、寝返りやハイハイの土台になるのである。²⁷⁾

小さく揺らすことは、筋肉の緊張を和らげる（固有覚）、揺れを感じる（前庭覚）、揺すられる手を感じ（触覚）、揺れることで接地面がしっかり感じられる（触覚）ことである。

この運動が土台と述べられているように、体が硬い、感覚の過敏や鈍さがある場合、たくさん触りながら揺らすことで、筋や腱の緊張をほぐし、神経系の働きを良くすることにつながると思える。

3. どんぐり

曲に合わせた寝返り運動である。「この運動は下限は6ヵ月くらいからだ、上限はない。大きい子どもにも十分に効果があるし、また好まれる」とされている。

0歳の子どもは、健常な子どもであれば、生後6ヵ月前後で寝返りができるようになる。「どんぐりどんぐりころころ……」と保育者が歌いながら転がってみせたり、大きい子どもたちがリズム遊びでやっているところを見せてゆったりしていると、間もなく自分でまねして転がろうとする。足の親指で床をけることを大切にす。²⁸⁾

『赤ちゃん－運動発達の神秘』(NHKDVD)には寝返りができるようになるまでの5ヶ月の乳児の様子が撮影されている。撮影された7日間、あおむけからうつぶせになろうとし、何回も何回も挑戦する。初日は体が伸びたまま横向きになり片足をだしているだけだが、3日目にはより体を丸め、足を交差し、寝返りしやすい姿勢になっている。²⁹⁾

このように何回も何回も寝返りに挑戦していく中で、乳児は地球の重力の中で自分の頭部の回転を感じ(前庭覚)、回転に伴う接地面の変化(触覚)、筋肉の働き(固有覚)を感じている。

寝返りは非対称性緊張性頸反射(ATNR)の抑制と関係するとの報告もある。寝返り運動を繰り返す中で、ATNRが抑制され、頸性立ち直り反応、迷路性立ち直り反応が確立していく。また、頭を回転させたときに、眼球が反対方向に回転することで固視を維持することに関与する前庭動眼反射(VOR)が促され、発達していく。

眼・脳・体の相互関係は生後1年の間に基礎能力が確立される。つまり、あおむけばかりの姿勢で過ごしたり、向き癖があったりする状態が続くと、VORが現れにくくなり、固視することが難しくなる可能性があると考えられる。もし寝返りをする経験が少なければ、ATNRの残存やVORの発達の遅れにつながる可能性も考えられた。

どんぐりのリズムあそびを通して、そのような発達の抜けを補うことにもつながっていると考えられた。

4. 両生類のハイハイ

両生類のように、胸からお腹を床につけて、背骨をくねらせ、足を交互に出して床を蹴り前に進む。さくら・さくらんぼのリズムあそびの

中でもとても大切な運動とされている。

斎藤は「この運動の下限は、自らハイハイをするようになる7～8ヵ月ごろからであるが、これもまた上限はない」とし、以下のように述べている。

この運動を十分やって立ったかどうか、運動能力の基礎になっていくので、十分に広い床面で這わせるようにすることである。

発達に障害のある子どもは、すぐにお尻を上げて高バイをしようとしたり、つかまり立ちをしようとしたりする。³⁰⁾

0歳時期に十分這ってない子どもたちの発達を促すためにも、腕や足腰の弱さを克服させてあげるためにも、金魚運動と同じようにこの運動も各年齢のリズムあそびに取り入れている。³¹⁾

腹ばい位では、頸部や体幹の伸筋群の活動が高まる。あおむけでは視覚刺激が単調だが、腹ばい位では頭部を持ち上げることで視野が拡大し、視覚入力が豊富になるとともに、重心が高くなり前庭覚による調整が活性化される。緊張性迷路反射(TLR)が制御されていく。腹ばい移動を通して重心の左右へのコントロールを学習する。³²⁾

腹ばい移動では、自らの意思で自ら動くことで、自分自身におこる動きの変化、それに伴い変化する視覚情報を経験し、その経験がまた動くことへの動機となり、能動的に移動していく。興味をもった物に近づこうという意思のもとに行われる腹ばい移動は、触覚、前庭覚、固有覚と視覚からの情報を統合していく重要なプロセスである。

このように腹ばい位は立位や歩行につながる抗重力筋を発達させる重要な姿勢であるとともに、腹ばい移動を通して触覚、前庭覚、固有覚と視覚からの情報を統合していく。斎藤が腹ば

い位で遊ぶことと両生類のハイハイを重視していた理由がここにある。

5. こうま（四つばい、高ばい）

「ハイシハイシ あゆめよこうま…」の曲に合わせて、四つばい、高ばいをするリズムあそびである。

誕生日間近の子どもたちは、この四つ足ハイハイに進み、その後、自分の力で立ち上がるようになる。このような自然の移動運動をリズムあそびに仕立てたものである。

最初は曲に合わせてひざつき四つ足ハイハイである。ホールをみんなで一定方向に移動する。その際、足の親指をしっかりと床につけさせることが大切である。³³⁾

ピアノを1オクターブ高くすると、膝と腰を上げて高足ハイハイに移ることにする。このときは、どうしても足の指先をしっかりと床につけなければならなくなる。指先がよく動かさない子も、この運動を繰り返しているうちに、いやおうなしに指先を使うようになるので、大変発達を促すのである。³⁴⁾

四つばい位は、肩甲帯、体幹、骨盤、股関節筋群の筋力と協調的なコントロールが必要になる。手に体重をかけることで手掌アーチを形成する筋群の発達につながる。

四つばい位でのロッキング（前後左右に揺れること）は、前庭覚や固有覚を作動させ、骨盤と大腿の関節の安定性につながる。

四つばい移動は、上下肢の体重支持と体重移動を同時に行うため、体幹筋群の対角線上の共同的なコントロールが必要とされ、脊柱のカウンターローテーション（反回旋）が起こり、左右の連動した動きにつながっていく。

6. ロールマット

ロール状に丸めたマットの上につぶせになり静かに両手を下につき、前転をする。年長はあおむけも行う。

首が座ったら行う運動であるが、小さいうちはマットの上で全身を金魚の要領でマッサージするだけでもよい。小さい子どもには体に合った小さいロールマットを使い、お腹に手を当てて介助する。

まだ首がしっかり座る前の赤ちゃんや、障がいを持ったお子さんも、このロールマットの上で背骨を伸ばし、優しくマッサージをしたり、ゆるやかに揺すってあげると、緊張が解けてぐっすり眠ることができる。³⁵⁾

現在も実践を継承するくさぶえ保育園の前田綾子は「一番重要なことは、保育士が手で子どものカラダをさわることだ。（中略）毎日のロールマットは触覚刺激だけでなく、固有覚や前庭覚への良好な刺激になる。【さわられる・ゆらす・前転・後転・逆立ち・背骨を丸める・反らせる・胸を開く・手指を開く】というこれらの動作を毎日、朝ひとりに3分もあればできる」と述べている。³⁶⁾

このように、「全身の血流をよくし、緊張を解き、腕の力をつける」とされているが、加えて、マッサージにより触覚に働きかけ、ゆるやかに揺すってあげる（前庭覚）、緊張がほぐれる（固有覚）、前転する（前庭覚・固有覚）、年長児は仰向けから倒立する（前庭覚、固有覚、ボディイメージの発達）ことが発達につながると考えられた。

感覚統合訓練では、バランスボールを使うことがあるが、バランスボールは球形のためバランスを崩しやすいのに比べ、ロールマットは円柱状のため、横には落ちる心配が少ないため、子どもが安心して取り組むことができる。

考察

1. 感覚運動経験と発育発達過程に沿った運動

これまで述べてきたように、さくら・さくらんぼ保育では、自然豊かな環境と発育発達過程に沿ったリズムあそびを通して、乳児期から豊富な感覚運動経験を積むことで、感覚統合や原始反射の統合など中枢神経系の機能の土台を育てることを重視していたといえる。

私たちは、心理学的な考察も大切に考え、親子、また保母と子ども、子ども同士の心理的な関係も話し合うが、より大切に考えて話し合うのは、猿から人間への発達の道すじを科学的に学び、エドワード・セガンの生理的教育に励まされつつ、子どもの手の発達、感覚機能と運動機能の発達、その統合能力の検討、言語機能の発達如何についてである。³⁷⁾

このように斎藤は心理学的な考察も大切にし

ながらも、より感覚機能と運動機能の発達、その統合について注目していたことがわかる。

太田 (2011) は斎藤の保育実践において、「前庭覚」「固容受容覚」「触覚」という3つの感覚が大きなウェイトを占めているとし、「これらの感覚が栄養となって、姿勢保持・バランス機能などの身体の土台や、自分の身体を動かすための身体図式（脳の中にある身体の地図）を形成していく」と述べている。³⁸⁾

エアーズは脳幹を中心とする皮質下機能の重要性に着目し、感覚-感覚入力-統合-知覚-認知という発達プロセスについて感覚行動発達のモデル（図1）を構築した。前庭感覚、固有受容感覚、触覚の3つの感覚を主とした感覚の統合が、姿勢、バランス、筋緊張、眼球運動、ボディイメージなどの感覚運動機能の発達につながり、行動や学習の基盤となる。³⁹⁾ さくら・さくらんぼ保育では、自然豊かな環境、乳児室、

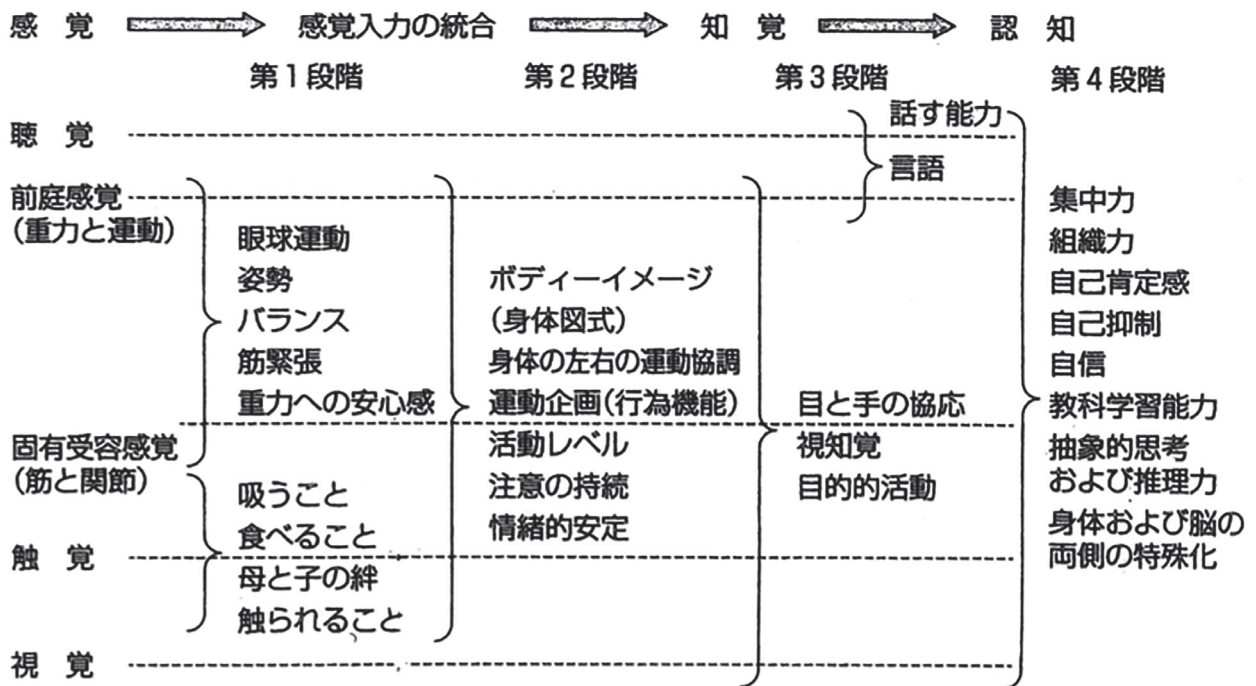


図1 感覚統合の発達モデル

出所：Ayres「子どもの発達と感覚統合」より一部改変

出典：加藤寿宏（2018）発達障害児に対する作業療法

－感覚統合から見た自閉スペクトラム障害の感覚・運動。発達 155,p.63

リズムあそびを通して、皮膚感覚（触覚）、前庭覚、固有覚そして視覚や聴覚との感覚入力の統合が行われ、ボディイメージや運動企画（行為機能）等につながり、集中力や自己肯定感の基盤となっていたと考えられた。

2. リズムによる構造化

熊谷（2017）は『自閉症と感覚過敏 特有な世界はなぜ生まれ、どう支援すべきか？』において、感覚過敏を自閉症の人々が示す多くの症状の発生源ととらえ、「これまで自閉症は、感覚過敏という側面は無視して、その結果ともいえる認知や言語や行動の障害だけで定義されてきた」とし、その支援のためには「環境を整え、選択肢や進む方向を分かりやすく提示し、支援していく」、「音楽や運動や造形活動などを取り入れて、動きに乗りながら行動を進める力を育てる必要がある」と述べている。⁴⁰⁾

さくら・さくらんぼ保育では、まさに熊谷の述べるように、乳児期の保育環境を最も大切に、リズムに合わせた運動を通して「進み方の時間的な構造」、つまり運動企画（行為機能）を育てていったといえる。

3. 自発的、主体的な活動

さくら・さくらんぼのリズムあそびは、寝返りやハイハイなどの発育発達過程に沿った運動を、集団のリズムあそびとして、模倣を通して主体的に動くことに意味がある。

原（2011）は「『斎藤公子のリズム遊び』は、遊びであって訓練でも体操でもありません。（中略）常に、『子ども主体』という原点に立ち戻って考える必要があるのです」⁴¹⁾と述べている。

高橋（2015）は「長年、全国各地の保育実践の中で『リズム』が受け継がれるうちに、その本来の意図が理解されないまま、形だけの模倣

にとどまっているケースや、画一的で訓練的要素だけが突出して取り上げられたために、現代の保育観にそぐわないと判断されるケースも見受けられる」⁴²⁾と指摘している。

斎藤は、「われわれ保育者の任務は、本来乳幼児のもつ能動的探索行動をいかにして十分に発揮させることができるか、ということである」⁴³⁾と述べている。

さくら・さくらんぼ保育では、子どもたちが集まって一斉に活動する時間はリズムあそびくらいであり、あとは豊かな自然環境の中で主体的に遊ぶ自由な時間が保障されていた。リズムあそびも訓練や体操として行われていたのではなく、模倣を通して主体的に動く遊びとして行われていた。

課題

1. 触覚、前庭覚、固有覚の重要性

一般的に感覚といえば「五感」をイメージし、発達が気になる子の課題として捉えるときにも触覚過敏、視覚過敏、聴覚過敏、味覚過敏（偏食）が意識されやすい。

五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）は意識しやすい感覚であるのに対して、無意識に使っている触覚、前庭覚、固有覚は意識しにくい感覚である。⁴⁴⁾（図2）

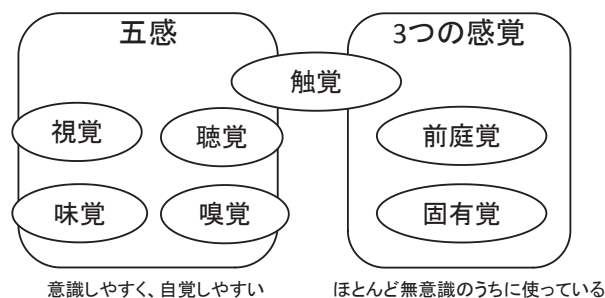


図2 自覚しにくい3つの感覚

出典：木村順（2014）「保育者が知っておきたい発達が発達気になる子の感覚統合」学研 p.20

保育関係の教科書や子育てに関する書籍でも五感について書かれていたり、感覚の大切さを述べていたりするものがあるが、近年増えてきた感覚統合に関する書籍を除けば五感の範囲に留まっているものが多い。養育者や保育者に、無意識に働く感覚(触覚、前庭覚、固有覚)の重要性を伝えていく必要がある。

2. 腹ばい位、ハイハイの重要性

前述したように、さくら・さくらんぼ保育では、首の座った0歳児は目が覚めているとき、一定時間腹ばいにし、ハイハイがたっぷりできる環境を整えていた。

加藤(2016)は「SIDS(乳幼児突然死症候群)予防の視点から仰向け寝が推奨され、1992～1999年にかけて向き癖・斜頭・後頭部の扁平が急増した」とし、斜頭の原因の一つとして、仰臥位保育をあげている。また「仰向けで寝かされていることの多い乳児の多くは『向き癖』がある」と述べている。⁴⁵⁾

松坂(2017)は岡山県T市の1歳6ヶ月検診を受けた幼児の母親を対象にした調査から、寝返り前に目覚めているときの腹臥位経験のないものが29.8%であり、その第1の理由は『危険だから』62.3%であったとしている。⁴⁶⁾

感受性期(臨界期)に眼帯で片目を遮断して過ごす弱視になるという実験結果が示すように、適切な時期に適切な感覚入力を受けることが重要である。乳児期にあおむけのままの姿勢で過ごし腹ばい位や寝返りの経験が少ないことは、前庭覚や固有覚への感覚入力がかかなり少なくなってしまうことにつながる。また、現代の家庭の育児環境では、ハイハイをする床面が少なく、すぐにつかまり立ちをしてしまう。

首の座ったところから目覚めているときは、一定時間、腹ばい位ですごすことやハイハイをす

ることの重要性を養育者や保育者が認識できるようにしていく必要がある。

3. 乳児が育つ環境の重要性

0歳児の育つ環境は、重要である。斎藤はすでに1976年から以下のように述べ、何度も乳幼児の育つ環境とテレビのことを指摘している。

今日では、狭い部屋の中で歩行器に入れられて、まだ0歳児のころからテレビをみるだけですごさせられている子どもが多くなり、ハイハイをしないで歩き始める子が多いようだ。(中略)幼い0歳の時から、まわりの人間の語りかけ、具体物(対象物)をさして触れさせて、言語を教えることの大切さをつくづくと考えさせられる。⁴⁷⁾

子どもに与えられているのは、身動きできない狭い空間と、子どもの頭を受け身一点張りにし、柔軟な想像力が育つ機会を奪い去ってしまうテレビジョンだけ。これで子育てがうまくいくほうが奇跡というのが実態なのである。⁴⁸⁾

私も園にテレビをおかないだけでなく、家でもテレビを普通に話ができるようになるまではつけないようにしてもらい、食事もおやつも園と同じように甘いものをなくしてもらい、日曜などは山あるきをさせてもらうなど両親の協力を大きく頼む。⁴⁹⁾

熊谷(2017)は「子どもを過剰な刺激の中にさらさず、落ち着いた環境の中で親子の関係を作っていく必要がある」と述べ、テレビや電子機器などから多量の刺激を受けることのない状態にすることが望ましいとしている。⁵⁰⁾

西原(2000)は『「赤ちゃん」の進化学』において、「脊椎動物の細胞の遺伝子の引き金は、質量のあるこれらの物質(カルシウムやイオン、栄養、酸素、酵素、サイトカイン、ホルモンなど)

のみならず、質量のないある種のエネルギーによっても引かれる」⁵¹⁾と述べ、光・電波・磁気から、重力・温熱刺激・音波・圧力といったエネルギーを、量子力学レベルの物質として、栄養(食物)や酸素と同等に扱う必要性を述べている。

重力や光・音などへの適応が乳児期の重要な課題であり、そのためには乳児が育つ環境の重要性について、社会全体で考えていく必要がある。発達が気になる子が増えている背景には、現代社会の環境があることが推測でき、感覚運動経験を豊かにできる環境を作っていく必要がある。

おわりに

さくら・さくらんぼ保育では、自然豊かな環境と発育発達過程に沿ったリズムあそびを通して、乳児期から豊富な感覚運動経験を積むことで、感覚統合や原始反射の統合など中枢神経系の機能の土台を育てることを重視していたといえる。

現代社会の子育てや保育環境は感覚運動経験を十分に積むことが難しくなっている。だからこそ、感覚運動経験の重要性を養育者や保育者に広く伝えていくことが重要である。特に、胎児期から新生児期、乳児期の育ちが大切なため、助産師、保健師、保育士などが連携していくことが大切であると考えられた。

<参考文献>

- 1) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課(2012) 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について
- 2) 木村順(2014) 保育者が知っておきたい発達が気になる子の感覚統合. 学研, pp9-10
- 3) 大城 昌平・儀間 裕貴(2018) 子どもの感覚運動機能の発達と支援：発達の科学と理論を支援に活かす. メジカルビュー社, pp9-10
- 4) 同上 p.23
- 5) 和久田佳代(2013) 発育発達過程に沿った子どもの運動あそび. 聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要(11) 45-54.
- 6) 斎藤公子(1982) さくら・さくらんぼの障害児保育. 青木書店
- 7) 斎藤公子(1994) 改訂版さくら・さくらんぼのリズムとうた. 群羊社
- 8) 前掲7 p.189
- 9) 前掲7 p.199
- 10) 前掲7 p.101
- 11) 前掲7 p.104
- 12) 前掲7 p.37
- 13) 前掲7 p.37
- 14) 前掲8 p.18
- 15) 前掲7 p.37
- 16) 前掲7 p.101
- 17) 前掲7 p.104
- 18) 前掲8 p.20
- 19) 斎藤公子記念館監修(2011) 斎藤公子のリズムとうた. フリーダム, pp.24-25
- 20) 斎藤公子(1982, 2011 復刊) 『子育て＝錦を織るしごと』かもがわ出版, p.126, p.130
- 21) 森岡周(2015) 発達を学ぶ：人間発達学レクチャー. 協同医書出版社, p.17
- 22) 斎藤公子(2002) 私の保育の真の師に捧ぐ. 地学教育と科学運動 41.
- 23) 斎藤公子(2007) 生物の進化に学ぶ乳幼児期の子育て. かもがわ出版, p.99
- 24) 前掲20 p.25
- 25) 斎藤公子・小泉英明監修(2009) 映像で見る子どもたちは未来－乳幼児の可能性を拓

- くⅡ. フリーダム (2・3) 16-21
- 26) 加藤静恵 (2016) 視知覚 (ビジョン)・協調運動の発達を促す育児支援～寝返り・ハイハイの重要性を考えよう～. 第57回日本母性衛生学会総会・学術集会講演要旨集. 5-20, p.8
- 27) 前掲 20 40
- 28) 前掲 8 p.33
- 29) NHK (2012) 赤ちゃんー運動発達の神秘. NHK エンタープライズ
- 30) 前掲 8 p.35
- 31) 前掲 20 p.46
- 32) 前掲 22 p.11
- 33) 前掲 8 p.36
- 34) 前掲 8 p.37
- 35) 前掲 20 p.50
- 36) 前田綾子 (2018) ロールマットの効用. 赤ちゃんの育て方第7回研修会資料
- 37) 前掲 7 p.48
- 38) 太田篤志 (2011) 発達障害児の感覚運動機能と斎藤保育の接点. 子育て 錦を紡いだ保育実践 - ヒトの子を人間に育てる -. エイデル研究所, p.37
- 39) 加藤寿宏 (2018) 発達障害児に対する作業療法ー感覚統合から見た自閉スペクトラム障害の感覚・運動. 発達 155, pp62-69
- 40) 熊谷高幸 (2017) 自閉症と感覚過敏: 特異な世界はなぜ生まれ、どう支援すべきか?. 新曜社
- 41) 原陽一郎 (2011) 斎藤公子の保育実践の継承と発展を考える. 子育て 錦を紡いだ保育実践 - ヒトの子を人間に育てる -. エイデル研究所, p.61
- 42) 高橋うらら (2015) 子ども一人ひとりの表現を大切に～さくら・さくらんぼの「リズム」をのびのび・生き生き～. 女子体育 57
- 43) 前掲 8 p.72
- 44) 前掲 2 p.20
- 45) 前掲 27 p.13
- 46) 松坂仁美他 (2017) 乳児期の腹臥位経験が運動発達に及ぼす影響. 保育と保健 23 (2) 62-65
- 47) 斎藤公子他 (1976) あすを拓く子ら. あゆみ出版, p.84
- 48) 前掲 8 p.17
- 49) 前掲 7 p.106
- 50) 前掲 41 p.131
- 51) 西原克成 (2000) 「赤ちゃん」の進化学: 子供を病気にしない育児の科学. 日本教文社, p.206